

十勝オコッペ遺跡について

後藤 秀彦^{*}・佐藤 訓敏^{**}



PL.1 十勝オコッペ遺跡航空写真

I. はじめに

十勝オコッペ遺跡は、北海道十勝郡浦幌町字昆布刈石に所在する北海道史跡の擦文集落跡である。

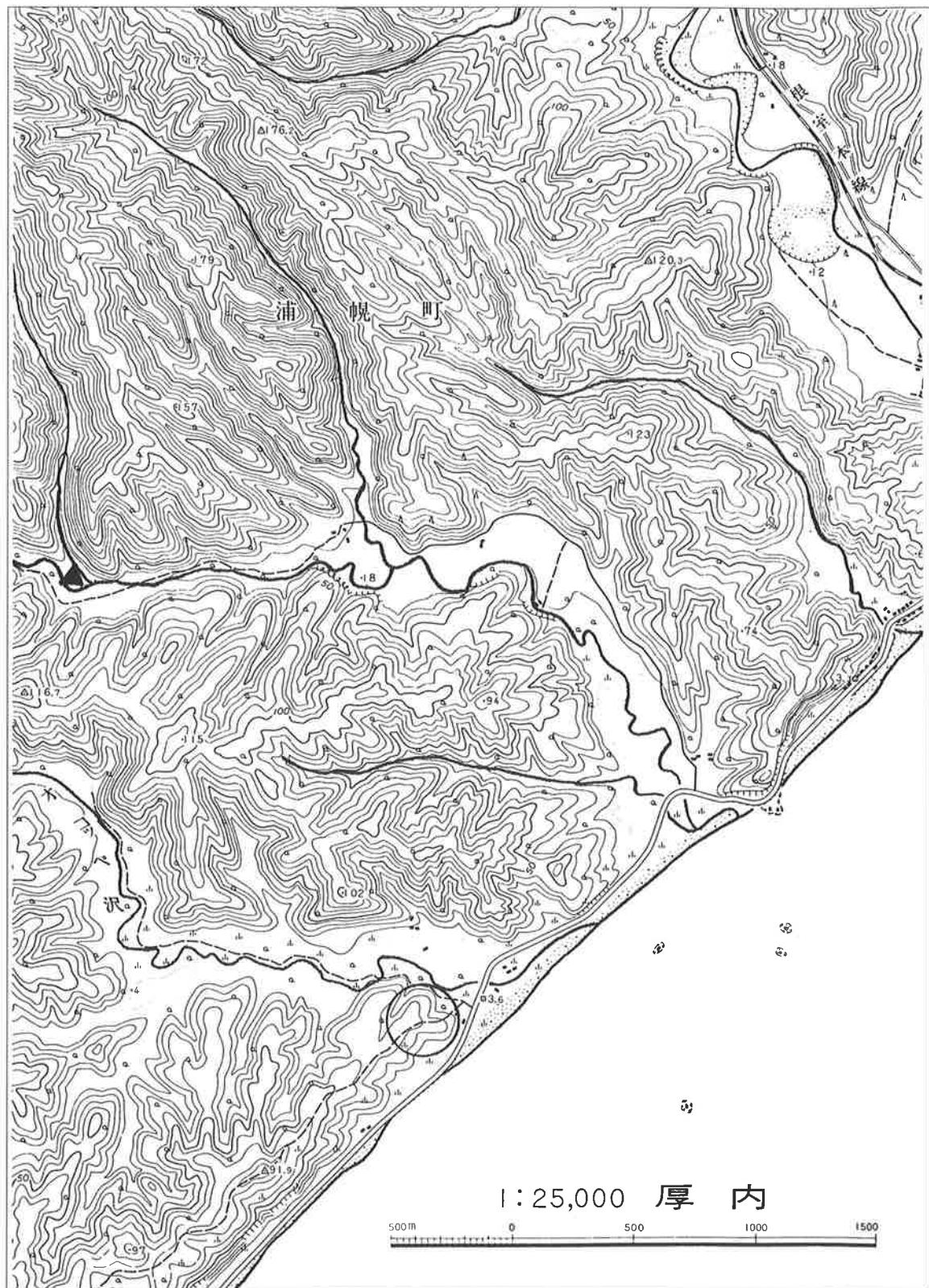
この遺跡は、斎藤米太郎（1935）によって「附近菅原氏牧場内十八箇の竪穴を発見す（高津氏談）」と報告されているものに当り、発見自体は昭和初期にまで遡ることができるが、一般に知られるところなく、改めて発見されたのは、1971年浦幌町が計画した第2次農業構造改善事業草地造成工事の施工に伴う町教育委員会の事前の埋蔵文化財分布調査によってである。その後、町教育委員会によって簡単な地形測量図が作成され、おおまかな竪穴の分布把握が行われた。また、土地所有者菅原薰氏は当遺跡の重要性を深く認識され、保護に

協力されて、現状のまま保存することに同意されてきた。

一方、北海道教育委員会も、太平洋に臨む擦文集落跡として注目し、1976年5月21日、十勝オコッペ遺跡群とともに北海道史跡に指定し、現在に至っている。

この間、当遺跡の現状および内容などについては、北海道教育委員会（1978）がごく簡単に触れているに過ぎず、実態は必ずしも明かではなかったので、ここにその概要をとりまとめて報告する次第である。

なお、これに伴う地形測量は1986年8月31日・9月14日・10月12日の3日間、筆者の一人佐藤のほか川内良修（札幌学院大学OB）・堺井久喜（札



Map. 1 十勝オコッペ遺跡周辺図（この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「厚内」を複製したものである）○：十勝オコッペ遺跡 ▲：チプネオコッペチャシ跡

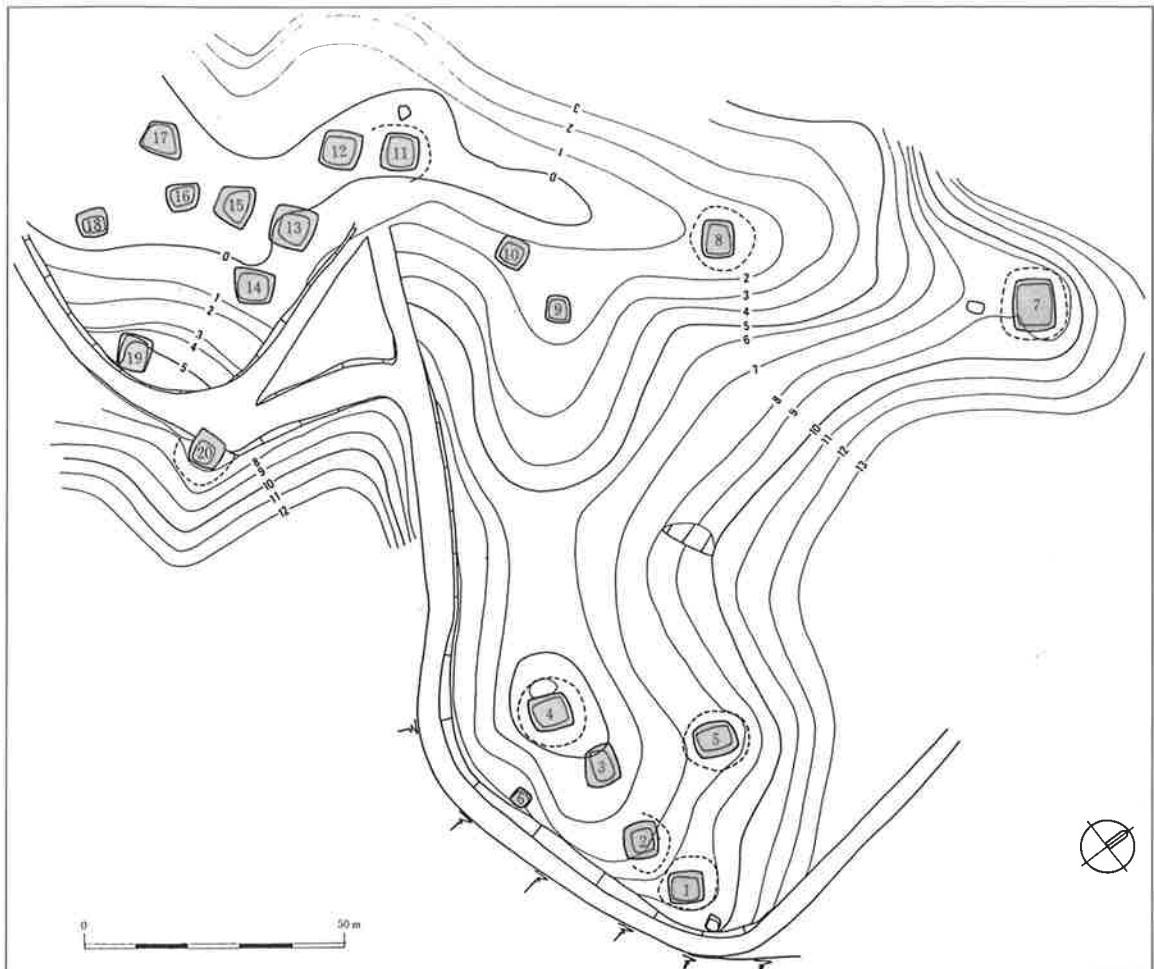


Fig. 1 十勝オコッペ遺跡地形測量図

幌学院大学々生）・佐藤美奈子が行い、トレース（）は北沢実の手をわざらわした。また、この報文をまとめるに当り帯広柏葉高校教諭石橋次雄氏に多大なご教示を賜った。ここに、銘記して感謝申し上げたい。

さらに、この報文に使用した十勝オコッペ遺跡の地形測量図の原図（1/500）は十勝川流域史研究所が所蔵しているので付記しておく。

II. 十勝オコッペ遺跡の位置と環境

本遺跡は、北海道東部の太平洋を眼下に臨む海岸段丘上に所在している。この海岸段丘はオコッペ沢（注）の右岸河口付近に位置し、標高約20～30mの箇所である。海岸段丘は、太平洋岸に沿って北東～南西方向に狭長な形態を示し、白糠丘陵の南西端付近に当る。遺跡の所在する付近は概

ね平坦で、北東方向に尾根部が伸長しているが、北側は深い沢となって落ちこんでいるほか、東および北東側はオコッペ沢によって開析された幅約400mの平地となっており、この中央から南側の山裾をオコッペ沢が東流し、太平洋に注いでいる（Map 1）。

当遺跡の最寄りの遺跡を概観すると、チャシ跡が多く、3基が所在している。このうち、最も接近しているのはチブネオコッペチャシ跡で北西2.4kmに、他はアツナイチャシ跡が北北東4kmに、国史跡オタフンベチャシ跡が北東6.6kmにある。

これらのチャシ跡は各々立地も形態も異なるが、比較的初期のものと考えられ、筆者の一人後藤の分類によるオタフンベチャシ跡が第Ⅱ群a類、チブネオコッペチャシ跡が第Ⅱ群b類、アツナイチャシ跡が第Ⅲ群b類に相当する（後藤、1982）。

また、Map 1 で、当遺跡から海岸線に平行して南西方向に伸びている点線は、松浦武四郎が『蝦夷日誌』の中で「川口〔十勝川〕より昔は汐干の時（十五丁廿五間）、^(ママ)タマネ平（大崩平）の下を通り行し也。今は新に道を此峠の後ろに切て、（八丁四十間）ホンイショコベ（小滝）まで行下る。此道また下り難き時はヲコッペ逆行に宜し（六丁）。ショコベ（小滝）本名シャウケイベにて、名義、滝の水が飛と云儀なり。此辺沙地也（十三丁五十間）。コンブカルウシ〔昆布刈石〕岩崩平磯、名義、昆布取に多しとの儀。此岬風雨にて通り難き時は上に新道有て、其を廻る也」という記事に相当するもので、1805（文化2）年に幕命を受けて近藤重蔵らが開削したものである。

この幕命を受けて開削した「新道」は、現在も馬車道として所々に痕跡を残しており、近いうちに全行程を踏査したいと考えている。

本遺跡と同時代の集落跡としては北東方向の太平洋岸にノトロ岬竪穴群、西側 9 km の地点に旧東寺院遺跡がある。このうち旧東寺院遺跡は浦幌川の左岸に営まれた遺跡で、6 基の竪穴が河岸段丘

上に残されているものである（斎藤、1935）。

また、これとは別に南西 8 km の太平洋岸から浦幌十勝川左岸には、その数およそ 500 基と考えられる十勝太遺跡群がある。ここでは、十勝太河岸段丘遺跡（赤沢、1967）、十勝太古川遺跡（浦幌町教育委員会、1973）、十勝太若月遺跡（石橋ほか、1974・石橋ほか、1975）の発掘調査が実施されているほか、十勝太安栗遺跡の地形測量図（佐藤、1974）も公表されている。

III. 十勝オコッペ遺跡の空中写真

PL. 1・PL. 4 は本遺跡の空中写真である。1973年10月、機会あって浦幌町が山林のネズミ駆除のための薬剤散布にチャーターしたヘリコプターに塔乗することができ、オタフンベチャシ跡、十勝太河岸段丘遺跡、十勝川口チャシ跡、十勝太若月遺跡、十勝太西遺跡と本遺跡などをモノクロとカラーで撮影した。

本遺跡の分では、主に北西方向から南東方向に撮影したが、特に太平洋岸に近い方の竪穴の様相が、盛土とともに明瞭に写し出された。しかし、



PL. 2 十勝オコッペ遺跡近景

太平洋から離れた部分については、木々にさえぎられてうまく撮影することはできなかった。

IV. 十勝オコッペ遺跡の竪穴分布

前述したように、本遺跡は海岸段丘の最東端に位置している。遺跡は東西180m、南北200mの範囲にわたり、中に竪穴20基と、性格不明の落ちこみ3基が分布している。性格不明の落ちこみ3基のうち、1～2基は住居跡の可能性も捨てきれないが、ここでは触れない。

また、竪穴周辺の盛土は概して海岸段丘縁辺部のものに顯著であり、合計8基がこれに当る。

さて、これら20基の竪穴はその配置関係からA～Eまでの5群に分かれる(Fig. 2)。この5群は分布する範囲を基準に分けたものであるが、これらは各々次のような立地を占有している。

A群：東(太平洋)側へ伸びる尾根の頂上付近から、主に標高の低い地点に分布するグループで北と南の両脇に各々1基の竪穴を有する。6基となる。

B群：北東へ伸びる尾根の先端付近に位置するもので、単独の1基からなるものである。オコッペ沢に最も近い位置に所在する。

C群：北東へ伸びる尾根の基部付近に位置するもので、場合によっては隣接するD群との統合も考えられる群。尾根部はやや狭い。

D群：東および北東へ伸びる尾根の基部に位置するもので、比較的小規模の2竪穴からなる。場合によっては隣接するC群との統合も考えられる群。

E群：本遺跡の最西端に位置する10基からなる竪穴群。10基中、8基は最も標高の高い位置に所在し、2基は南部の標高の低い位置に所在する。この2基の竪穴はかなりの急斜面に所在しており、他の竪穴とは若干様相を異にした地点に立地している。このE群は、構成する竪穴の数から考えて、さらにいくつかの群に分けられる可能性がある。

以上のように本遺跡の竪穴群を便宜的にA～E群の5群に大別し、その占有する立地などについて簡単に説明を加えたが、これらの群の各々は更に次のように検討を加えることができる。

まず、A群では1号・2号のグループ、3号・4号のグループ、5号・6号の4グループに細別することが可能である。1号と2号の関係については、竪穴の位置関係・盛土の様相から細いトレ

ンチを両竪穴間に設定すれば、前後関係は明かになる。また、3号と4号についても同様のことと考えられる。問題は2号と3号の関係である。ここは距離が若干あり、立地もほぼ平坦に近いので盛土による前後関係が把握できない可能性がある。同様の状況は5号と6号についても言えるが、この2竪穴については段丘尾根部からはずれて所在しているので、各々時期が異なる可能性がある。1号～4号に至る4基の竪穴は、尾根の頂上にほぼ直線的に立地し、さらに1号・2号、3号と4号は竪穴の向きも同じように看取されるので、前述のように1号・2号、3号・4号、5号、6号の4小群に分けて考えるべきであろう。

また、この位置関係は宇田川洋(1972)の提唱したSTV settlement patternによく似ている。

B群は7号の1基のみである。全集落中、段丘の最縁辺部に位置し、特異な立地である。比較的規模の大きな竪穴で、オコッペ沢を眼下に臨む位置に当る。

C群は8号の1基のみである。この竪穴もポンと1基のみ存在しており、他竪穴とは独立して所在しているように思われる。層位確認のためのトレンチを設けても、前後関係の把握は困難であろうと考えられ、遺物からの検討しかないと思われる。隣接するD群の9号・10号竪穴とは同レベルに位置し、同じ群ということも考えられるが、一応別の群としておく。

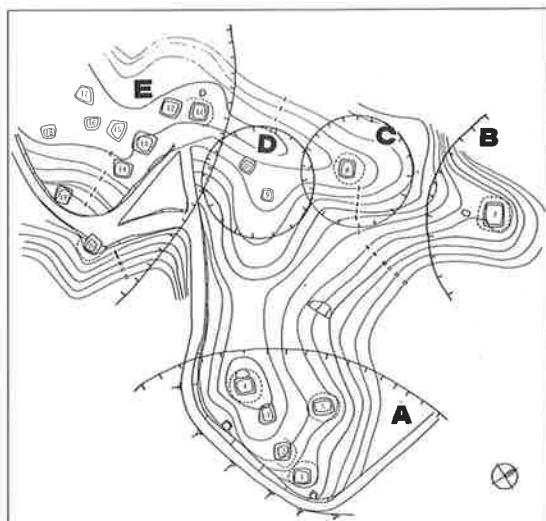


Fig. 2 十勝オコッペ遺跡の竪穴番号と群分け

D群は9号・10号の2基である。両者とも盛土の存在は顕著ではないが、場合によっては層位確認のためのテストトレンチによって前後関係の把握が可能かもしれない。C群のところで触れたように、C群との統合も考えられるが一応別の群としておく。

E群は本集落の中では最も西に所在する10基からなる大グループである。この竪穴群はその数の多さから、常識的に考えて同時併存したとは考えられない。1~3基づつのまとまりでグルーピングされるものと思われる。発掘調査が行われていないので明確な答を出すことはもとより不可能であるが、強言するならば次のようにだろう。

まず、11号と12号のグループ、13号と15号のグループ、14号、16号と17号のグループ、18号、19号と20号は同時併存か単独ということになろうか。

以上、本遺跡の竪穴群の分布や地形、竪穴の方向性などを考慮して、同時併存関係や前後関係を見て来たが、発掘データの無い中での検討であるため十分な考察は不可能に近い情況である。これ

らの検証からどのようなことが言えるか、次に見ていこう。

V. 考察にかえて

擦文集落——特に中小規模——の様相については、これまでいくつかの遺跡で意欲的な取り組みが図られてきた。

まず、釧路市STV遺跡では比較的幅の狭い尾根上の小集落の変遷過程が盛土の上下関係から把握され、2棟づつの住居が南向きの斜面の下から上へ移動したことが明かにされている（宇田川、1972）。こうした様相を宇田川洋は「STV settlement pattern」と呼んでいる。

常呂町岐阜第三遺跡は三方を沢に囲まれた11基からなる集落であるが、1,500m²くらいの平坦面にほぼ2基づつ4期にわたって生活が営まれている。ここでは、同時併存する住居の相互方向は沢筋もしくは台地縁と一致、住居方向、カマドの方向は一致、住居は1~2戸など6つの規制が摘出されている（藤本、1977）。



PL.4 十勝オコッペ遺跡の竪穴の位置

同じく常呂町岐阜第二遺跡の東地区では10の時期にわたって居住が繰り返され、前記した岐阜第三遺跡の様相を実によく証明している。要するに、基本的には南斜面から南平坦面を沢筋に沿って使用していくというパターンである。また、ここでは岐阜第三遺跡には認められなかった1期3棟という例も検出されている（藤本、1972）。

名寄市智東H遺跡は天塩川東岸の低位段丘上の平坦面に所在している。ここでは1～2棟の単位で4～8期にわたって居住していたことが考察されている（藤本、1982）。

また、このほかに浦幌町十勝太若月遺跡（河村、1975）、常呂町トコロチャシ南尾根遺跡（藤本、1976）、同町ライトコロ川口遺跡（藤本、1980）などでも同じような分析と結果が得られている。

そして、藤本強（1982）は、これらの成果を集約して種々の法則または規制といったものを摘出している。これによれば、

- ①あきらかに前代に住居があったと思われるくぼ地はさける。
- ②同時併存する住居は1～3である。そのなかでは2が多い。
- ③同時併存する住居相互の方向は、隣接する沢筋もしくは台地縁・尾根筋の方向にほぼ一致する。
- ④同時併存する住居の方向は、カマドの方向をふくめてほぼ一致する。
- ⑤住居相互の距離は、地形の制約、前代の住居のくぼみのあり方などによって変異があるが、住居の一辺の1～2倍の距離が通例である。
- ⑥居住好適地から住みはじめ、しだいに劣悪な地点にも居住するようになる。
- ⑦居住好適地が1地点内で得られなくなると、別の地点に移動する、そこで条件が悪くなると、ふたたび前の地点にもどることもある。

の7点である。

この法則または規制を本遺跡に当てはめて考えてみると、どういうことになるであろうか。以下、若干の考察を加えてみよう。

1点目はくぼ地を意識的に避けるという点である。これについては従来から識者の間で指摘されてきたことである。したがって、住居跡同士の切り合いの例に乏しく、擦文編年をも難かしくしてきたことは周知のとおりである。本遺跡においても見かけ上は切り合い関係は認められないよう

であり、この点については問題はないであろう。

2点目は同時併存が1～3基であるという点である。これについては、現在のところ発掘調査も全く行われていないので検証しようがないのが実態である。しかしながら、4点目・6点目と合わせて、現況の住居配置を見ると、基本的には2棟、時によって1または3棟という考え方は妥当性をおびてくる。本遺跡において最も居住条件の良いのは南斜面で、なおかつオッペ沢、海に近いA群の所在する一帯である。ここから低地に下りるのが最も傾斜が緩く、距離も近い。そうしてみると、このA群敷地に最も早い段階で家が構築されたと考えるのが自然であろう。さて、A群内の住居配置は5号と6号を除くと、1号～4号まで尾根筋にそってほぼ一直線に並んでいる。この流れは、宇田川の言う「STV settlement pattern」に最も近いものである。したがって、この遺跡では、最も初期の段階ではSTV settlement patternで出発したと考えてよい。藤本（1982）の指摘する3点目にも合致するものである。

4点目の検討は、発掘調査を待たなければならない。筆者らのこれまでの、本町内における経験から言えば東～南東～南の範囲にカマドが存在することが多いが、本遺跡ではどうであろうか。

5点目は問題の残るところである。特に、E群のうちの11号と12号、13号と15号などはあまりにも近く、検討を要するかもしれない。藤本によれば、住居と住居の距離は一辺の1～2倍が一般であると指摘しており、やや近い印象を受けるが、今後の課題として残しておこう。

6点目は、前述したようにA群のポジションが最適地であろう。海、川に近く、下へおりるにも傾斜が緩かで、且つ陽当たりも良好である。そうした意味からすると、B群は1ランク下がるが、次の適地である。海へはやや遠くなるが川へは近い。陽当たりも良好である。このA群、B群を先に占地されてしまうと、C群・D群とも立地には大差ない。しかし、A群とD群との間にはやや距離があることから考えると、常識的に考えてC群→D群の順であろう。E群は、20号が段丘の南東縁に所在はしているが、総体的には海岸段丘の縁よりはやや奥まった箇所という印象が強く、立地としての好条件は、平坦面であるという点と陽りであろう。したがって、少なくともこの位置に住居が営

まれた時期にはA～D群の各占地は既利用の空間として、当時の人々に自由に使用されたであろう。

7点目は、他遺跡との関連である。最も近接する南西8kmに所在する十勝太遺跡群や、同じ太平洋岸のノトロ岬竪穴群との比較が重要であろう。この点については、今のところ検討はほぼ不可能である。将来の課題として残しておかなければならない。

こうしてみると、A群はSTV settlement patternに近似し、B群～D群に至る経過は岐阜第三遺跡の様相に似ていると言える。

要するに、擦文期の集落様相を見ると、宇田川洋や藤本強が指摘してきた様々なパターンの組み合せが、中集落や大集落を形成したと言える。これらの中・大集落は、現在の我々の目が結果としての中・大集落を認識しているのであり、集落形成期には1～3戸の単位をもって集落を形成していたのであるから、立地などの条件を考慮しながら占地を決定付けていったものであろう。

V. おわりに

太平洋に所在する擦文期の中集落跡である十勝オコッペ遺跡を通じて、集落の残されてきた経過の一端を考えてみた。この分野では、宇田川洋や藤本強らの一連の業績に負うところが大きいが、これらの分析のもととなった遺跡は常呂遺跡群など、オホーツク海沿岸のものが多い。今後は、こうした集落跡の分析を全道のものを対象として行っていく必要性があるが、小集落の分析を積み重ねて、中・大集落の様相をパターンの組み合せの中で検討すべきであろう。

浦幌町内には十勝太河岸段丘遺跡や十勝太安栗遺跡など、中・大集落は比較的多いが、未調査集落の測量なども含めて、今後とも分析を進めていきたいと考えている。先学諸兄のご叱正をお願いしたい。

(* 浦幌町郷土博物館学芸員・**帯広百年記念館学芸員)

注 現在利用されている各種地形図を見ると、オコッペ沢の位置はMap 1のとおりである。しかし、多少古い地形図を見るとオコッペ沢の位置は、1つ北東側の沢に当り、現在オコッペ沢と称している沢は「駅通沢」と記載されている。筆者らの知る限りでは、この遺跡とかかわる沢は駅通沢が正

しいと思われるが、ここでは一応現行の地形図の記載に従って「オコッペ沢」を使用した。この間の誤認あるいは誤記については、後日何らかの形で論及しようと思う。

引 用 文 献

- 赤沢威 (1967) 「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』75-2
 石橋次雄・後藤秀彦・木村方一 (1974) 『十勝太若月—第2次発掘調査一』
 —————・————・山口敏・河村七五三喜 (1975) 『十勝太若月—第3次発掘調査一』
 宇田川洋 (1972) 「擦文集落の一分析例」『物質文化』19
 浦幌町教育委員会 (1973) 『浦幌町十勝太古川・若月遺跡調査概報—第1次発掘調査一』
 河村七五三喜 (1975) 「十勝太若月遺跡における集落分析の方法について」『十勝太若月—第3次発掘調査一』
 後藤秀彦 (1982) 「チャシの形態分類に関するメモ」『浦幌町郷土博物館報告』19
 斎藤米太郎 (1935) 『郷土先史民族砦趾』
 佐藤訓敏 (1974) 「北海道十勝太安栗遺跡について」『史峰』5
 藤本強 (1972) 「岐阜第二遺跡調査の経過と問題点の摘出」『常呂』
 ————— (1976) 「遺物・遺構に関するいくつかの問題について」『トコロチャシ南尾根遺跡』
 ————— (1977) 「本遺跡発見の住居址に関する若干の考察」『岐阜第三遺跡』
 ————— (1980) 「ライトコロ川口遺跡における集落の変遷」『ライトコロ川口遺跡』
 ————— (1982) 『擦文文化』

1986年12月16日	印 刷
1986年12月20日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 木 村 旭	
発 行 所 浦幌町郷土博物館	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社	
北海道帯広市西7条南6丁目	